
授業の成立が困難な学校で多文化共生を語る

—ゲストティーチャーとしての関わりから—

Narrating multicultural coexistence at a school with class management problems: involvement as a guest teacher

孫 美幸*

SOHN Mihaeng

This paper analyzes and discusses results of a questionnaire concerning student impressions of Korean-Japanese residents. It aims to examine changes in the awareness of students, who were attending a school with class management problems, after a guest teacher, this author, gave a talk on the topic of multicultural coexistence. Results suggested that the following two points had the most significance:

- (1) Directly addressing the difficulties confronted by people living through various historical complexities, such as Korean-Japanese residents, provided hints on how to live, especially for children living in difficult family and school environments. That is, the guest teacher and her family became role models for the children.
- (2) Regardless of whether impressions of Korean-Japanese residents improved or not, many students were of the opinion that meeting the author and hearing the talk had been a good thing. For children in a school where various forms of violence were part of daily life, direct involvement with the guest teacher promoted an interest in the "other" before their eyes. In other words, it demonstrated that they had the potential to transform exclusive relationships, those in which they disregarded others they viewed as weak, to relationships based on mutual support.

*日本学術振興会特別研究員 京都大学人文科学研究所

A long-term multicultural coexistence program that involves cooperation between the guest teacher and the regular teaching staff needs to be developed for the future. Additionally, children will need to have a sufficient sense of self-affirmation to be able to accept talks on the topic of multicultural coexistence; that is to say, they need to be emotionally stable and they must have the capacity to create relationships of mutual trust.

1. はじめに

本稿では、筆者がゲストティーチャー¹として行った多文化共生をテーマにした授業を通して、生徒たちの在日コリアンに対する意識がどのように変容したかを考察する。そして、授業の成立が困難な学校で、ゲストティーチャーが多文化共生をテーマに語ることの意義について明らかにする。

授業の成立が困難な学校に関する研究は、「教育困難校」「荒れた学校」「学級崩壊」などをキーワードに、学校(学級)経営やカリキュラム編成の立場から論じたものが圧倒的に多い。子どもたちの規範意識をどう育てればいいのか、学校を立て直すのに有効な取り組みやカリキュラムはどういったものなのか、という視点から論じられている²。また、学校や生徒たちを対象にして、どういった要因でこのような現象が起きているのかを調査し、解決策を模索するといった、社会学や心理学の研究もある³。

しかし、授業の成立が困難な学校での、多文化共生に関わるテーマを扱った先行研究は、大変限られた状況が続いている。その中でも代表的なのは、当時大阪府下の公立高校教員であった伊井直比呂が書いた実践研究論文「教育困難校」から見える日本社会と国際理解教育の役割」[伊井2003]である⁴。この中で、学校外団体やゲストティーチャーとの連携した学習の際には、「生徒一人一人への眼差しの中に、期待と応援のメッセージを意図的に込めていただいたり、対話の時間を取っていただいたり、(中略)暖かい眼差しによって「新しい自分」に気がつけるよう展開していただくものとした」[伊井2003:151]というように、教師とゲストティーチャーが時間をかけて丁寧に打ち合わせをした様子が窺える。そして、それによって生徒の中には、学びへの充実感や学校への誇りにもつながる部分が見えてきた者もいると、その変容について書かれている。しかし、協力団体やゲストティーチャーの多くが国際協力、開発教育、異文化理解を中心にしており、筆者が本稿で述べようとしている日本在住外国人との多文化共生をテーマとした内容が含まれてない点⁵、多くの外部講師たちの話の概要

と生徒の感想については記載があるが、それぞれの講師の語りの詳細がどのように生徒の意識変容につながったかを検討していない点などが課題として挙げられる。

本稿は、ゲストティーチャーの立場から在日外国人との多文化共生をテーマとした語りが、授業の成立が困難な状況でどのように生徒によって受け取られ、理解されたかを分析、考察するものである⁶。また、中学校での実践であるという点からも、これまでの先行研究になかった領域であり、小学校や高等学校で成されてきた先行研究の成果をさらに補強し、授業の成立が困難な学校での学びのあり方に示唆を与えるものとなる。

2. 授業の成立が困難な学校における、ゲストティーチャーと協力した多文化共生教育の必要性

筆者は、2000年に京都市公立中学校で初めての外国籍教員として採用されて以来、2004年に退職した後も、関西圏を中心にさまざまな学校で、人権や多文化共生をテーマにした授業をする機会に恵まれてきた。しかし、テーマは同じでも、学校や地域の状況によって、ゲストティーチャーとして関わることの難しさも感じてきた。

本稿で取り上げる京都市のA中学校では、ここ数年生徒の暴力事件が絶えず起こってきた。それと同時に、自らの内側にこもり心を病む生徒たちの存在も報告されていた。地域では、「荒れた学校」「できれば行きたくない学校」と呼ばれるようになってしまった。数年前には、当該学年の教師たちのほとんどが、別の学校に異動してしまうという異常事態も起きた。そんな混乱の中で、学校に残った教師、新しく赴任してきた教師たちが、なんとか状況を打開していこうと模索し始めていた。ちょうどその頃、筆者にゲストティーチャーとして多文化共生や在日コリアンへの理解をテーマに授業をしてほしいと依頼があった。

それでは、このように学校環境や生徒の状況が大変厳しい中で、ゲストティーチャーとともに多文化共生をテーマに授業を行うことが、どうして必要なのだろうか。

日本の多文化共生に関わる歴史を概観する時、在日コリアンの存在を抜きにしては語れない。戦時中日本の植民地支配下で、いったん「日本人」として包摂されるものの、その中で「新しい日本人」である朝鮮半島出身者への差別や偏見があったことは言うまでもない。終戦直後、朝鮮半島の混乱を避け、日本での生活を続けざるをえなかった約60万人は、「外国人」として様々な行政施策から排除されていった。現在もなお、解決されていない問題、例えば、戦時動員の被害者に対する補償、民族教育の保障、無年金高齢者の救済などが多くある⁷。

このように在日コリアンは、日本社会の中でさまざまな排除を受けてきたが、その

中でも学校や教育の問題をめぐる排除の構造は深刻である。筆者は、2006年から4年間京都市外国籍市民施策懇話会委員として活動したが、その中で各委員から教育に関わる報告が多く行われてきた。特に、朝鮮学校に通う子どもたちの健康診断や給食などが十分な設備のない状態で運営されており、費用が足りない分は保護者のボランティアで賄うなど、子どもたちの健康や安全が脅かされている現状が報告されている。また、在日コリアンだけでなく、ニューカマーや文化背景が多様な子どもたちへの日本語等の教育・生活支援、母語・母文化保障、高校進学へ向けた制度的な改革の必要性、不就学への対応等、学校教育の中での多文化背景をもつ子どもたちの排除の問題は緊急を要するものばかりであった⁸。

筆者は、在日コリアンを初めとした多文化背景をもつ人々が経験している、社会において排除されてきたという事実や、その中でもがきながら、なんとか生きていこうとしてきた感覚が、学校環境が厳しい中で日々を過ごしている子どもたちの悩みや辛さにも通底するのではないかと考える。それは、「できれば行きたくなかった」「荒れていて怖いと思っていた」学校に通う子どもたちも、いわば教育において排除された体験をすでにしてきたと考えるからである。経済的に余裕がある場合などには、保護者や自らが望むような体制の学校を選択できれば、私立やその他の学校に行くことはできた。しかし、さまざまな理由で、地域の学校へ行くという選択肢しか残されなかった。そのような排除された感覚のまま学校生活をスタートし、そして自らもその困難な状況の中に巻き込まれていく。そのような状況の中で、なんとか前に進もうとする気持ちや感覚を、多文化共生をテーマにした授業を展開していくことで育てていけるのではないかと考えた。

竹沢泰子[2011:8]は、「日本独自の多文化共生の可能性」としてNPOたかとりコミュニティセンターの実践を取り上げ、「ここでは、ベトナム人や在日コリアンといった「外国人」が特別扱われるのではなく、地域社会における高齢者、青少年、沖縄・奄美出身者、障害者も「多文化」に含まれ、先駆的な多文化共生の実践場として全国から注目を集めてきた⁹」と述べている。ここで竹沢は、「共生を日常的に実践し、五感を通して感じられる空間としての「地域社会」に、可能性を見出している。筆者も、このような多文化共生の可能性を、ゲストティーチャーとして地域の存在とゆるやかにつながりながら、学校を拠点にして探っていこうと考えている。

しかし、「学校」という場が、そもそも「疎外の始まる場所¹⁰」という指摘がある中で、以上のような考えは、どう成り立つのだろうか。筆者は、「疎外の始まる場所」だからこそ、その中に飛び込み、排除の構造を編み直して行く作業が必要ではないかと考える。ただ、結局は学校のもつ排除の構造を、良心的に強化しているのではないかとい

う不安が常につきまとう。地域とつながり、ゲストティーチャーのような存在が頻繁に学校に出入りすること、学校と地域の壁を低くし両者の間を流動的にすることは、常に第三者の視点を学校内に持ち込むことになる。筆者は、このように第三者の視点を学校内に持ち込むことが、学校のもつ排除の構造を良心的に強化していくことの抑止につながるのではないかと考える。

3. ゲストティーチャーが行った、在日コリアンや多文化共生をテーマとした授業の概要

A中学校のある地域は、遺跡や寺院など文化遺産が多くある一方で、近年市街地化が進み、さまざまな背景をもつ人々が流入しやすい場所でもある。学校長がこの地域の社会福祉ケースワーカーと話した際、「いろんな人が流入する」という点について、「低所得者層が多い」「生活保護を受けやすい」「何か問題が起きればすぐ逃げられる」など、さまざまな噂を聞きつけ、それを知った上で、または誰かに呼び寄せられて、移住してくる人々が多いことが挙げられた。その一方で、長年この地域に住む人々は、文化財を守る活動、地域の歴史を学ぶ会など、地域の伝統や良さを守っていき、発信していきという取り組みを多くしている。しかし、長年暮らしている住民と、複雑な背景をもちながら新たな場所を求めて移ってきた住民が交わることがないという現実がある。それは、長年暮らしている地域住民が、複雑な背景をもった人々と関わりたくないという危機感の現れである。また、複雑な背景をもつ人々も、毎日の暮らしに疲労困憊している中で、地域の活動等に接点がないということである。しかし、その両者が初めて出会う場がある。それが、「学校」である¹¹。

A中学校の2012年5月時点での生徒数は614名、1年5クラス、2年6クラス、3年7クラス、育成2クラスである¹²。京都府下でも名の知られた生徒指導困難校である。生徒同士のトラブルやけんかは日常茶飯事で、2年前の卒業式には10人以上の警察官が体育館に配備された¹³。地域の警察官がパトロール等で、たびたび学校を訪れる。そのような状況の中、教員たちが少しずつ状況を打開しようと、生徒たちと一緒にさまざまな取り組みを進めている。校門の近くには花壇に花が飾られ、トマトやピーマンなどの栽培もされるようになった。最近話題になったニュースなど掲示物が増え、以前のように破られることもなくなった¹⁴。放置されていた図書館の整備も始まった。地域の小学校と連携して、ソーシャルワーカーや児童相談所等と連携した会議を定期的に開くようにもなった。そんな変化の兆しを生徒や保護者が少しずつ感じる出来事も起きてきている。4月の入学式の際、生徒会長の3年生が、500人の生徒と保護者を目の前にスピーチした。「私はA中が好きです。この一年でA中学校を変えてみせます。」

その言葉に静まりかえった会場から、大きな拍手が沸き起こった¹⁵。

筆者にゲストティーチャーとして、在日コリアンや多文化共生をテーマに話をしてほしいという依頼が来たのは、以上のように少しずつ学校の変化に向けて教員たちが動き出した、2011年12月のことであった。以前、筆者と同じ学校で勤めていた教員からの依頼にもとづいて、どのように進めていけばよいか打ち合わせを行った。日頃の授業は、50分時間があっても、30分行うのが限界であり、話をじっとして聞くことはできない。特に、筆者が授業予定の2年生は、5クラスがほぼ学級崩壊状態である。体育館で行った全校生徒対象の講演会でも、終始生徒たちの話声が止まず落ち着かない様子であった。そのような状況の中、学年の教員が話しあい、なんとか2学期に在日外国人、多文化共生をテーマにした学習を実施した。学年の副担任が、さまざまな背景の外国人の役割を演じて、自分のルーツや悩みなどを語りかけるというものだった。今回の講演で、その際の学習のふりかえりの機会にもなればということであった。2012年1月に事前アンケート、2月に授業、授業後に事後アンケートを行った¹⁶。

ゲストティーチャーが行った授業の概要は以下の通りである。

日時：2012年2月10日(金) 5限(2・3・4組)・6限(5・6組)入れ替え制

5限(13:10～14:00)、6限(14:10～15:00)各50分間

場所：A中学校大会議室

授業タイトル：「平和な社会を創るために いのちのバトンを未来へ」

(1)導入、授業を行うにあたってのルール、自己紹介

- ・保育園に通うわが家の子どもの紹介(写真を提示しながら)

保育園では毎日、おはしを上手にもつこと、一人でトイレに行くことなど、中学生のみんなには当たり前のことを一生懸命小さい体と心でがんばっている。みんなは今日一日何をがんばってきただろうか。(自分が成長してきたことをふりかえり、筆者や家族のライフヒストリーと重ね合わせていくきっかけとする。)

(2)あなたはどんな人ですか?～食べ物にたとえるなら

- ・事前アンケートの紹介
- ・日本人?韓国人?～文化のまざりあいと2つの名前

私は自分を食べ物に例えると、「韓国のり」だと思う。見た目はよく似てるけど、日本の味付けのりは甘く、韓国のりはちょっと韓国風味。日本と朝鮮半島の混ざり合いの中で育った私らしい。

両親は韓国籍で、私は京都で生まれ育った。日本語が一番うまい。韓国語

は大学で学んだ。私は名前が2つある。日本名と韓国名。今の名前は大学の頃から使い出した。在日コリアンの名前が2つあるのは、100年前の戦争と関わりがある。1910年からの植民地政策の名残。私のひいおばあちゃんは、幼い頃のおじいちゃんを連れて、日本に渡って必死でがんばって生きてきた。100年前の政策の名残の中で今も生きている人たちがたくさんいることを実感してほしい。特に京都は、西陣織や友禅染に朝鮮人の職人さんが多くいたことなど、関わりが大きいことを大切に思っしてほしい。

(3) 多文化の豊かさ～在日コリアンでよかったこと

- ・ハングルの読み方や歴史

在日コリアンでよかったことは、2つの文化の流れや重みを感じられること。みんなもいろんな文化、言語、歴史に興味をもって勉強してほしい。

(4) 生き方いろいろ～「ありがとう」って伝えたい人

- ・事前アンケートの紹介

「ありがとう」という言葉、ぜひ直接自分の口で伝えてほしい。昨年3月11日に東北で地震があった。私の仙台に暮らす親戚は、いのちは無事だったが、家を流された人もおり、仙台の映像を見るのがとても辛かった。「ありがとう」という言葉、感謝することの大切さを感じている。

- ・いのちのつながりの中で～家族から学んだこと

私が紹介したいのは母である。2つ母がすごいなと思うところがある。一つは私を出産した時のこと。日本語が全くわからない中で、私を産んだ。もう一つは、母が夜間中学校に通ったこと。母は学校に行った経験がほとんどなく、学校へ行くことが夢だった。夜間中学校で学びながら、家事やパートもして、なんとか卒業まですることができた。

戦争や差別の中で生きぬいてきたひいおばあちゃんやおじいちゃん、貧しい中でも勉強してきた母の苦労を思うと、自分の悩みは小さいと思っている。

(5) 不安や悩みをこえて～あなたの夢は何ですか？

- ・社会の矛盾に立ち向かう。～私の好きな言葉

人はみな生まれた国や環境は違うけど、一つだけ平等だと信じていることがある。それはチャンスの数。毎日の過ごし方、いろんな人との出会い、悩みも全部力にして、いい生き方をしていってほしい。今生きている人がどんなふうに生きるか、それが確実に次の世代に影響する。(プリントで自分の好きな詩やその背景をいくつか紹介する。)

4. 生徒の意識の変容～在日コリアンの印象を問うアンケート結果の分析を通して

本節では、授業前と授業後に同様の内容で実施した、在日コリアンの印象について問う質問の回答結果を中心に分析する。ゲストティーチャーの立場から在日外国人との多文化共生をテーマとした語りが、授業の成立が困難な状況でどのように生徒が受け取り、理解したかを分析する。このような語りを通じた授業が、さまざまな背景をもち、困難な状況にある生徒たちがもがきながらもなんとか前へ進んでいこうとするような、意識の変容が見られるのか、検証する。

事前、事後のアンケート結果は以下の通りである。

<在日コリアンの印象について>

(事前・事後アンケートの両者がそろった125人のうち、番号のつけ忘れ、未記入など(4人)を除いた、残り121人が分析対象)

	事前(総計121人)	事後(総計121人)
(1) 良い印象	2人(2%)	34人(28%)
(2) 少し良い印象	4人(3%)	34人(28%)
(3) あまり良い印象がない	6人(5%)	4人(3%)
(4) 悪い印象	0人(0%)	1人(1%)
(5) なんとも思わない	47人(39%)	40人(33%)
(6) わからない	62人(51%)	8人(7%)

上記の中で、まず事前アンケートの段階で「在日コリアンのことが何のことか全くわからない」ということを書いていた生徒が半数を占めるのは、2学期に教員がおこなった授業で使われた用語が「在日韓国人」であり、筆者が使った「在日コリアン」という単語とつながらなかったということが背景の一つとして挙げられる。

次に、事前から事後への生徒たちの印象の変化について整理すると、以下の7つのグループに分けることができた。

- ・グループ1・・・「良い印象」のまま 6人(5%)

(例) 2→1 K-POPとか、韓国の人が日本で活躍しているから → 生まれた国が違ったり、国籍が違ったりしても、いろんな文化の交流があったりとか歴史のつながりとかがわかりました。

- ・グループ2・・・「全く知らない」から「良い印象」へ 28人(23%)

(例) 6→2 よく知らないから → 文化がちがう中で努力している人たちだと思えるから

- 6→1 わからないから → 孫美幸さんのお母さんみたいに大変なこともあると思うけど、大変なことをのりこえて生きていることがすごいと思った。
- ・グループ3・・・「在日コリアンについて関心がない」から「良い印象」へ 30人(25%)
 - (例) 5→2 何のことかわからないから → 最初はなんの事かわからなかったけど、話をきいてたくさんの方の苦勞や文化のちがいをのりこえてきたんだなと思いました。
 - 5→1 外国の事だから興味が無い。 → 今日の学習で在日コリアンの事を学び、韓国人などの外国人がいて、文化と文化が結びつき、さらに新しい文化を取り入れられる事が分かったので良い印象を持ちました。
 - ・グループ4・・・「悪い印象」から「良い印象」へ 4人(3%)
 - (例) 3→2 少しこわい印象があるから → 話を聞いて前は少しこわい印象があったけどなくなったから。
 - ・グループ5・・・「関心がなかった」から「在日コリアンについて考えるきっかけ」となった。 24名(20%)
 - (例) 6→5 あまりよくわからないです。 → 住んでいて苦しい思いした人もたくさんいるし、戦争で日本がひどいことをしたんだなと思った。
 - 6→5 名前すらしらなかつた → 在日コリアンでも韓国人でも日本人でも同じ人だし、あまり変わらないと思う。100年前の戦争や日本人がやったことをぬけば。
 - ・グループ6・・・「関心があまりない」まま 24名(20%)
 - (例) 5→5 とくになにもしらんから → まだいまいち理解ができていないから
 - 5→5 空欄 → 別に来るも来ないもその人の勝手だから、それをおれたちがどうのこうの言う権利はない。
 - ・グループ7・・・「在日コリアンに対する偏見や誤解がとけない」まま 5名(4%)
 - (例) 6→3 空欄 → 在日コリアンは自分の国の言葉は分かるけど、違う国の言葉はわからないから。

上記7つのグループの回答の理由、授業を通して印象に残ったことを手がかりに、それぞれのグループの生徒たちの意識と、講演者である筆者の言葉とがどのように結びついていったか考察する。

グループ1の生徒たちは、事前アンケートの段階で、「在日コリアンに対して良い印象をもっている」と記載していた。しかし、その内容を見てみると、「K-POPとか韓国の人が活躍しているから」「日本でがんばって勉強している人なのかなと思う」「在日コリアンの人達は、日本の色々な観光地を巡って、日本に興味を持ってくれているように見えるから」など、芸能人や留学生、観光客と区別がついておらず、在日コリアンを誤解しながらも良い印象をもっていた生徒たちと言える。授業後のアンケート内容も、「日本のことをよく知っているから。東日本大震災のこともよく考えてくれると思う」「悪い印象がないから」など、必ずしも在日コリアンについて正しく理解したとは言えないが、留学生や観光客とは違う存在であるという認識には至っていた。また、一番印象に残った内容は、「不安や悩みをこえて」（2名）、「感謝したい人」（2名）、「文化の違い」（1名）、「全部」（1名）であり、その中には筆者が語った自分の悩みへの対処の仕方に共感するものが見られた。

- ・「今の不安や悩みはとても小さいということ 話を聞いてなんでそんな事で悩んでたんやろ?とかこれから悩むこともいっぱいあると思うけど小さいと思えばのりきれると思いました。自分1人で悩んで、ずっと落ち込んでいるよりも毎日笑顔ですごした方が楽しいし、悩みがあったとしてもそれをのりきれるような人になりたいと思えたから。」
- ・「不安や悩みをこえての時 学校での態度や先生への態度を悪くしたり、授業中に違うことをしているとチャンスのボールは横を通っていくって言う言葉がすごく心に残りました。私も授業中に手紙を書いたりしていたので、これからはがんばってやりたいです。」

グループ2の生徒たちは、事前アンケートで、「在日コリアン」という言葉自体が「全くわからない」と書いていた。「在日コリアンの事を今まで聞いたことがない」「何もわからない」「しらんから」など、言葉自体聞いたことがないし、全くわからないという状態であった。しかし、筆者の講演を聞いて、初めて「在日コリアン」がどういう存在なのかがわかり、「良い印象」へと変わった生徒たちである。事後アンケートでは、「文化がちがう中で努力している人たちだと思うから」「外国人とか在日コリアンとかの人はみんな怖いと思っていたけど、やさしい人もいるんだなと思ったから」「両方の国のいい所が感じられるから」など、筆者と出会い、話を聞いて、在日コリアンという存在がわかり、気持ちの変化につながっていったことがわかる。また、一番印象に残った内容は、「母の話」（13名）、「文化やハングルの話」（3名）、「一番好きな言葉」（3名）、「ありがとうのメッセージ」（2名）、「朝鮮と日本の関係」（1名）、「不安や悩み

をこえて」(1名)、「食べ物にたとえると」(1名)、「いのちのバトン」(1名)、「家族の話」(1名)、「100年前の戦争」(1名)、「全部」(1名)であった。この中で、一番多かった「母の話」に対する感想は以下の通りである。

- ・「お母さんが中学校に行くこと お母さんがねる時間をへらして、中学校に行ってから帰ってきて復習をしたと思います。孫さんのお母さんががんばれたのは、まわりのお父さんたちがいたからだと思います。僕にもチャンスがきたら孫さんのお母さんみたいにチャンスをいかせたらいいと思いました。」
- ・「孫さんのお母さんのはなし 孫さんのお母さんは、字の読み書きが全くといっていいほどできなかって、日本に来ててもできないことが多く、とても大変な思いをしたと思う。でも、くじけずに、一生懸命働いて、夜学校に行つて帰つて来てから勉強したりして、それでやっと夢やつた自分の店をもつことができすごいなと思った。努力することによって、どんな夢でも実現できるんだなと思ったし、私もあきらめたりせずに、一生懸命がんばつていきたいと思った。」

以上のように、母が小学校にもほとんど通わなかった中、幼い頃から仕事を続け、大人になって一から文字を学んでいく話は、授業の成立が難しい状況の中にありながら「学校で学ぶ」ということの意味を考え直し、また学びへの努力を惜しまないことの大切さを再確認する機会となった。このような意識が、在日コリアンが困難な状況の中でも努力し続ける姿とつながり、事後アンケートの「良い印象」へとつながったことがわかった。

グループ3の生徒たちは、事前アンケートで「在日コリアン」という言葉くらいは聞いたことがあると書いていた。しかし、「特に何も思っていない」「どうも思わない」「在日コリアンなどあったことがない」「関わったこともない」など、在日コリアンに対する関心は低く、深く考えたこともないという生徒たちであった。しかし、講演後のアンケートでは、「今日の学習で在日コリアンの事を学び、韓国人などの外国人がいると、文化と文化が結びつき、さらに新しい文化を取り入れられる事が分かったので良い印象を持ちました」「日本と韓国、両方のまざりあいが一番感じているし、その文化の混ざり合いもおもしろいとおもったから」「決して日本の否定をする人ばかりではないことがわかった。韓国のハングル文字をおそわったり、文化も知ることができた」など、筆者の講演を聞いて関心をもち、「良い印象」へと変わった生徒たちであった。また、一番印象に残った内容を分類すると(複数選択した回答を含む)、次のようであった。「母の話」(16名)、「好きな言葉、チャンスの話」(11名)、「ありがとうのメッセージ」(2名)、「文化やハングルの話」(2名)、「100年前の戦争の話」(1名)、「プリント

の詩」(1名)、「食べ物にたとえると」(1名)、「全部」(1名)。この中で、多数の意見が集まった、「母の話」と「好きな言葉、チャンスの話」に対する感想は以下の通りである。

- ・「孫さんの母の話 孫さんが反抗期の時に、お母さんが中学に行くって聞いてびっくりしました。孫さんのお母さんは小学校を途中でやめて、仕事をしているとか、今の私たちにはできません。でもそんなことをしていた孫さんのお母さんはすごいなあと思いました。孫さんのお母さんは学校に行くのが夢でもあったなんて私には信じられません。けど、こうして今学校に行けるのはすごいありがたいことなんだなあと思います。なのでこれからがんばっていききたいと思いました。」
- ・「私はいつも性格的に「劣等感」ばかり抱いてしまって、人をうらやましがってばかりです。が、今日の言葉を聞いて、自分も気づかないうちに、チャンスのボールを逃がしているのかな・・・。と思います。だから、いい言葉をもらったからには、もっともつとこれをバネにして頑張ろうと思います。」

グループ2の生徒たちと同様に、筆者の母の話は多くの生徒たちの心に残ったようである。それは、学校の環境がよくないとしても、学校にこれている自分たちと、そのようなチャンスもなかった母の生い立ちとを往還しながら、母が大人になって学びたいと強く思った気持ちや頑張りへの戸惑い、今の学校で自分もなんとかやっつけていけるだろうかという迷いなども垣間見える。また、筆者の好きな言葉、チャンスの話については、この話について書いた生徒のほとんどが、今の自分の授業態度があまり良くないこと、学習に対して後ろ向きな自分であったことをふりかえり、今の自分の学びの姿勢を軌道修正していきたいという決意を書いていた。そして、このようなことに気づかせてくれた筆者へのお礼なども書かれていた。辛い境遇の中で人生を送ってきた母の話と自分たちの境遇を重ね合わせたり、学びへの姿勢を問いたりする中で、筆者とそのような気持ちを一緒に共有できたことを通して、「良い印象」へと変わったことがわかった。

グループ4の生徒たちは、在日コリアンについて当初偏見をもっており、事前アンケートで「悪い印象」と答えていた。「少しこわい印象があるから」「ヤクザとかに多い感じだから」など、在日コリアンの歴史や背景をじっくり学んだ経験がない、または直接出会っていてもわからなかった等の理由で、偏見をもっていた生徒たちである。講演後、事後アンケートでは、「話を聞いて前は少し怖い印象があったけどなくなったから」「孫さんの話をきいてから在日の人も良いなあと思いました」など、筆者の話聞いて「良い印象」へと変わった生徒たちである。印象に残った内容を見ると、「母

の話」「ありがとうのメッセージ」「好きな言葉、チャンスの話」「食べ物にたとえるなら」と、全員バラバラであったが、筆者の話した内容やそこで紹介された同じ学年の生徒たちの意見に共感していたことが読み取れた。そして、そのような時間を一緒に過ごした筆者、つまり在日コリアンに対して「良い印象」と書くことにつながったのではないかと思う。

グループ5の生徒たちは、在日コリアンに対してほとんど関心がなかった。事前アンケートでは、「あまりよくわからないです」「聞いたことない」「気にしたこともなかった」「しらないから」など、関心の低い記述ばかりであった。講演後、事後アンケートでは、「住んでいて苦しい思いした人もたくさんいるし、戦争で日本がひどいことをしたんだなと思った」「在日コリアン=在日韓国人というだけで良いか悪いかわからない」など、在日コリアンという存在について考えるきっかけにはなったが、深い関心をもって理解を示すまでには至っていなかった。1回の講演で、しかも内容が他の学校で話すよりも少なく、講演中もなかなか静かにならないなど、在日コリアンの歴史や自身のライフヒストリーについて断片的な説明になってしまったこと、講演前に歴史的な事項を学習することや講演後に話の内容をゆっくりふりかえる時間などがなかったことなども、十分に生徒たちの理解を促せなかった原因として考えられる。そのような状況であったが、一番印象に残った話の記述内容を見てみると、「母の話」が一番多く、「ありがとうのメッセージ」が次に続いていた。内容は以下の通りである。

- ・「お母さんの話 たいへんな思いをして孫先生を産んだことと、がんばって日本語の勉強をしたことがすごかったです。」
- ・「生き方いろいろ～ありがとうって伝えたい人 孫さんの母さんの話とか、自分に置き換えて考えてみたらすごい不安やろーし、それを笑って話せるなんて強い人やなって思った。学校に行きながらパートもしてってそれを4年も続けたなんてすごい。帰って勉強して、それを一緒に手伝ってあげる夫さんもすごい優しくて、そういう人のつながりっていうのがいいと思った。」

以上のように、筆者の話や発表した生徒たちの意見に共感しながらも、自分の境遇と重ね合わせて考えているものは、ごく一部の生徒であった。また、グループ5の生徒たちは、これまでのグループ1～4の生徒たちと異なり、極端に記載が少ないものが多かった。教員からは学年の10%くらいの生徒たちは、十分に文章を書くことができないう指摘もあったので、思いを十分に言葉にできない子どもたちも含まれている。しかし、その点を鑑みても、感想の内容は、「すごいなと思った」「わかりやすかった」など、十分に自身の境遇と重ねて考えるまでには至っていない文章が多かつ

た。そんな中でも、「母の話」へ共感している生徒が一番多いことは、もう少し自分の置かれている環境やこれからの学習目標等について、ゲストティーチャーの話をきっかけに積み重ねて学ぶ機会を多くもてば、グループ1～4のような気持ちの変化にもつながっていく可能性をもっていると考ええる。

グループ6の生徒たちは、事前、事後ともに関心をあまり示さなかった。事前アンケートでは、空欄のまま提出していたり、「なんとも思わない」「とくになにも知らない」「在日コリアンに会ったことがない」など、非常に関心が低いことがわかる。講演を聞いた後でも、「いまいちよくわからない」「まだこの年齢だと何も感じない」「関係なくふつうに暮らしている」など、在日コリアンについて理解もよくできず、関心ももてないままの生徒たちである。この講演が、実質30分という短い時間であったことや、在日コリアンに関する客観的な事実、歴史的な項目や国籍条項など法律に関わることを削減したこともあり、話は聞いたけども、結局「在日コリアン」がよくわからないままであったことが窺える。このグループの生徒たちも、グループ5の生徒たちと同様に、事前学習等学びの積み重ねの機会があれば、意識の変容につながる可能性はあったのだろうか。講演の中で印象に残った内容について見ていくと、実際には「関心がないまま」で終わっていない生徒たちの思いの断片が表れていた。

例えば、事後アンケートで「在日コリアンのことがいまいちよくわからない」と書いていた生徒は、印象に残った話について「母のお話と震災のやつ 勉強するために睡眠時間をけずってやるのがすごいと思った。自分の親戚が震災の被害にあって「ありがとう」の大事さをしたのが共感できたから」と書いていた。また、別の生徒は、事後アンケートで「在日コリアンとは関係なくふつうに暮らしているから」と書いている一方で、印象に残った話については、「孫さんのお母さんの話 お母さんがいろんなことをのりこえて、命のバトンをつないできたんだと思った」と書いていた。また、ほとんどが空欄のままの生徒も、印象に残った話に「母」と一文字だけ書いてあるものもあった。

そして、このグループの生徒たちの一番印象に残った話も、「母の話」が一番多かった。このグループの生徒たちも、グループ5の生徒たちと同様に、粘り強くゲストティーチャーの語りへの理解を促す学習の取り組みを続けること、そして客観的な事実も含めて歴史的な背景や現在の法律に対する知識などの学習と組み合わせることなど、周囲の大人たちの努力によって、意識の変化につながる可能性を開いていくことができると考える。

グループ7の生徒たちは、在日コリアンに対する誤解や偏見が、講演を聞いてもとけないままであった。事後アンケートでも、「在日コリアンは自分の国の言葉は分かるけど、違う国の言葉はわからない」「別になんとも思わないけど、どっちかといったら国が違うので少し悪い方かなあとと思います」など、在日コリアンに対する間違った知識や偏見があることがわかる。講演中も話を静かに聞くという状況ではなかったことや、グループ5・6の生徒と同様に学びの積み重ねが十分ではなかったことなど、いろいろな原因が考えられる。しかし、このグループの生徒たちの数少ない言葉の中にも、筆者との出会いや話の内容から感じたことに、今後の学びの可能性を見出すことができる。

- ・「色んなことばが分かるっていうのはいいなあって思った。」
- ・「英語と同じように韓国語も頑張って習えばいけるかな～と思いました。」
- ・「孫美幸さんをみてこういう人ばっかだったらいいなと思いました。」

少しずつ芽生えている他者への共感の意識を深めていけるような学びの機会を多くつくるのが、今後は求められるだろう。

全体を通して、生徒たちが選んだ項目の割合でみると、在日コリアンの印象が良くなったと答えた生徒は、全体の56%で、6割弱であった。しかし、事後アンケートで、一見「関心がない」「わからない」を選んだ残りの生徒たちも、印象に残った話の内容をみると、困難な状況の中で人生を切り開き、大人になって本格的に文字を学んだ「母の話」への共感を示す感想が、他の項目よりも一番多かった。これは、困難な状況にいるからこそ、さまざまな苦勞を重ねてきた在日コリアンの生き方に共感し、その生き方が一種のロールモデルとなること、そして、自分の生活に重ねながら次の目標を見出していくといった一連の学習に発展する可能性をもつことを示している。そのためには、ゲストティーチャーが語る内容の理解を促せるような学習を、事前、事後で設定し、教員や地域の大人たちが生徒たちの学びを継続的に支えていくことが必要である。そして、そのような学びのあり方が、困難な状況にある学校で、生徒たちが平和に安心して生きていくための、一つの希望となるのではないだろうか。

5. 実践の成果と課題

本節では、筆者の語りに対する生徒たちの感想分析の結果をもとに、「困難な状況を生き抜いてきた身近なロールモデルの存在」、「さらに弱い者への排除から共に生きる関係への編み直し」という2点から、授業の成立が困難な学校で、ゲストティーチャーが多文化共生をテーマに語ることの意義や課題について考察する。

5-1. 「困難な状況を生き抜いてきた身近なロールモデルの存在」

事後アンケートの中で、生徒たちの在日コリアンに対する印象が良くなったか、無関心のままであったかに関わらず、一番多く書いていたのは、筆者の「母の話」に対する感想であった。その中には、他校で講演した際に出てくるような、母の頑張りに対して単に「すごい」「尊敬する」と称賛しているものもあったが、一生懸命に学ぼうとしていることに対する戸惑いや驚きを示す感想が見られたのがA中学校の特徴と言える。例えば、「そこまでがんばって夜間中学校に行って寝る間も惜しんで夢をかなえるというがんばりをほとんど実感したことがないから」「孫さんのお母さんが学校に行くのが夢でもあったなんて私には信じられません」「大人になってから勉強するなんて自分には絶対ないことだと思うので印象に残っていた」など、そこには、「本当に頑張ったという経験がない」「学校で学ぶことへの否定的な気持ち」「学び続けることへの疑問」などが垣間見える。

筆者が話の導入として、保育園に通う息子の写真を見せながら、「保育園に通う息子はおはしの練習をはじめました。おはしが使えないと来年小リス組さんになれないとって、一生懸命練習しています。みんなは今日1日何か頑張ったことはありますか?」と聞いた時、「がんばってなかった～」 「がんばれな～」と数人から声があがった。また、母の話の途中で、「みんなは今学校に毎日これいて、学校に行くなんて言われませんか?」と聞いた時、1人の生徒が「僕、お母さんに前(学校行かなくてもいい)と言われたことある～」と手をあげた。そして、感想文の中にも、「私は今このあれている学校に来るのはとても嫌です」「今まで授業中に寝たり、他のことをしたりして授業を全く聞いていなかった」と書かれたものがあつた。

このような感想や子どもたちの言葉から、毎日の学校生活がとても困難であること、学ぶ意欲が低いことが窺える。このような子どもたちの背景として、学校長や教員との打ち合わせの際に出てきたのは、幼い頃から複雑な家庭環境に育った子どもたちが多いということ、また一番身近な保護者からさまざまな虐待を受けてきた、または受けてきた疑いのある家庭も多いことが挙げられた。また、教員側も「家庭のせい、地域のせいと切り捨ててきたことも過去にあつたように感じる」という学校長からの指摘もあつた。

以上のような指摘からもわかるように、子どもたちはこれまで身近に、困難な状況の中でも一生懸命生きてきた大人たち、つまり自分のロールモデルとなる大人にあまり出会わなかつた。それゆえ、自分たちが辛い中でどのように問題を乗り越えていったらいいのかかわからない、ましてやそれを乗り越えながら学ぶ意欲にまでつながらないといった状況があるのではないかと、筆者は考えた。

事前アンケートの時点で、在日コリアンのことを「全く関心がなかった」「聞いたこともない」「わからない」と書いていた生徒が、事後アンケートで「良い印象」に変わったのは、グループ2～4であり、約50%である。その中の「母の話」に対する感想文を見てみると、「文化が違う中で努力している人たちだと思うから。苦しい中、陰で努力していた様子が伝わってきて感動しました。字が読めなかったり、話せなかったり、まざりあった文化の中で生きてきたのがすごいと思いました」「今日話をきいて良い印象をもった。孫先生のお母さんの分まで自分はずっともっと勉強していこうと思いました」「私たちが学校に行けることに感謝しないといけないと思ったから」「孫さんが話してくださったおかげで「在日コリアン」という意味が分からなかったけど、いろんなことをのりこえていて誰よりも人の気持ちが分かる人なんだと思いました」というように、母がさまざまな苦労を重ねて大人になり、そして日本という異国の地で夢をかなえたことへの共感や感動が綴られていた。そのような気持ちが、文化の混ざり合いの中で生きてきた母や筆者への共感へとつながり、結果として「在日コリアンの印象が良くなる」ことにつながった。

たまに学校を訪れるゲストティーチャーは、保護者や教員のような子どもたちの一番身近な大人ではない。しかし、少し身近な大人として学校に関わり、そこで在日コリアンの事例のように文化の混ざり合いの中で、さまざまな複雑な歴史の中で困難に直面しながらも生きてきた様子を直接伝えることは、特に家庭や学校環境が困難な状況にいる子どもたちの生き方へのヒントを示すこととなる。そのような存在が、子どもたちが生きていく上でのロールモデルの役割を担い、困難を乗り越えていこうとする気持ち、学ぼうとする意欲につながるきっかけとなるのではないだろうか。そして、そこで初めて目の前に立つ他者である在日コリアンを理解しようとし、共に生きることを考える余裕が生まれると思う。

畠中宗一[2009:73]は、「地域の安心・安全が担保されにくい現状」には、「他者への関心が低いことが関係している¹⁷⁾」と述べる。A中学校は、学校環境だけでなく、地域の安全も危うい状況であることが、社会福祉ケースワーカー等から指摘されてきた。長年暮らしている住民が、複雑な背景をもちながら新たな場所を求めて移ってきた住民と交流しようとしないのは、この地域の特徴である。このような大人たちの他者への無関心が、子どもたちにも影響しているとは言えないだろうか。この授業が行われるまで、教師や警察官など限られた大人たちしか授業をしたことはなかった。本実践のように、ゲストティーチャーが、子どもたちから発せられる様々な発言に対応しながら、多文化背景をもつ中で抱える悩みや苦労を一生懸命伝えたことは、子どもたちに関心をもって関わろうとしている大人が教師や警察官以外にもいるということ体を

現した。また、ゲストティーチャーが抱えている問題やそれをどう乗り越えてきたかなど、困難な状況にいる子どもたちの悩みに通底する部分が多く含まれていたことが、子どもたちの共感を呼んだこともわかった。子どもたちが目の前の他者であるゲストティーチャーの話しを聞いて感じたことをまとめ、文章に表していく過程は、畠中が述べる「他者の存在を受容し、同時にこちらの気持ちや想いもかえしていく」という関係、つまり「他者に対する誠実な関心をもつこと」の初期段階に立とうとしていることがわかる。

今後子どもたちが、在日コリアンや多文化共生をテーマとした語りをしっかりと受け止められるようにするためには、グループ5～7の残り44%の生徒たちや、ほとんど未記入で今回アンケート調査の対象外となっている生徒たちへの継続した学びの支援をどのようにしていくかという課題がある。今回の講演が、系統性をもったカリキュラムの一環として行われたものではなく、単発の講演会という位置づけであったことから、ゲストティーチャーの話す内容に関して補足や事前学習を行うことがなかったことも、子どもたちがしっかりと筆者の語りを受け止められなかった大きな原因の一つであると考えられる。また、生徒たちが30分程度しかじっと座って話を聞くことができないという状況だったので、筆者が当日の話の内容から、歴史的な経緯や現在の国籍に関する法律の知識など、客観的な情報を大幅に削減したことも一因として挙げられる。今後は、ゲストティーチャーと教員が協力しながら、長期的に実施していけるような多文化共生教育プログラムへと発展させていくこと、またその際常に学びの意欲を高めるといった点に着目することなどが重要である。そして、そのようなプログラムを一緒に創っていけるような教員へのサポートやケアも必要であると考えられる。

5-2. 「さらに弱い者への排除から共に生きる関係への編み直し」

生徒の感想の中で、「在日コリアンについて全く知らない」「関心がない」「悪い印象」から「良い印象」に変わったものの主な理由で目立ったのは、「筆者の話を直接聞いて良い印象に変わった」という内容であった。例えば次のような感想である。

- ・「最初は在日コリアンが何のことか分からなかったけど話を聞いてから少し良い印象を持ちました。」
- ・「今日話をきいて良い印象をもった。」
- ・「とても孫さんみたいな優しくそうな人がたくさんいそうだから。」
- ・「孫さんの話をきいたから。」
- ・「孫美幸さんを見て在日コリアンがこんなに良い人だと思っていなかった。」
- ・「話を聞くまで意味がわからなかったけど、孫先生の話をきいて、在日コリアン

の人の努力が伝わってきた。」

- ・「講演をやってくれたりするからです。」
- ・「いろんなことを説明してくれて、在日コリアンの人もいろいろ苦労しているのがわかりました。」

また、「関心がないまま」の生徒たちの感想の中にも、「在日コリアンについてはよくわからないが、筆者に直接会って話を聞いたことが良かった」と書いている文章が散見された。例えば、次のような感想である。

- ・「人生についての話。人生は大切にしながら心から思いました。」
- ・「全ての内容に深い感動をもったから。」
- ・「孫美幸さんをみてこういう人ばっかだったらいいなと思いました。」
- ・「美幸さんのお母さんの話がとても心に響いた。」
- ・「孫さんのおじいさんとおばあさんのこと。戦争中命がけて命をつないだことがすごいと思ったから。」

以上のような感想から、直接筆者と出会い話を聞いた経験が、在日コリアンに対する意識の変化につながっていく大きな要因の一つであることがわかる。それは、授業後の生徒たちの様子からも読み取れた。

筆者が授業を始めた時、ほぼ私服に近い生徒たちが男女問わず1割程度おり、その中には飴をなめ、携帯電話を出し、音楽プレーヤーのイヤフォンをしたままの者もいた。「きしよい、きもい、うるさい」などの言い合いも聞こえてきた。「先生って何者ですか？」など、自分の言いたいこと、聞きたいことを思いつき次第話してくるような状態であった。その後、「孫美幸です。みなさんこんにちは」とあいさつをしても、話声は取まらなかった。「ソングクウ！ソングハン！キムジョンイル！」とはやしたてる子には、「ソングクウとか、久しぶりに聞いたわ。小学生からやったかな？」と話したところ、やっと多くの子どもたちから笑顔が見えた。また、イヤフォンをしたままの子には、「話を聞いてね」とイヤフォンをとってプリントを渡すなどした。このように個別にいろんな子どもたちに対応しながら、なんとか話を進めていく中で、静かに聞ける場面も出てきた。また、授業の途中、騒がしい男の子に女の子たちから「うるさい！」と注意する場面もあった。

授業後、一番騒いでいた男の子と握手をした。「がんばってな」と声をかけると、照れくさそうに「うん」と言って教室を出ていった。また、松葉杖をついた女の子が「プリントに書いてある詩、心に響いた。いいなと思ったよ」と話しかけてきた。その他にも、「友達に朴くんっていう男の子がいて、しょうたって呼んでって言われたけど、韓国語の名前があるし、先生は朴くんっていうし、私は何て呼べばいいの？」と、筆

者に相談してくる子もいた。

後日、筆者がA中学校を別の用事で何度か訪問した際も、一番騒いでいた男の子たちが筆者を見つけて、「見たことある！前に学校に来た人や」と声をかけてくるのが多々あった。ある日、「こんにちは。先生見たことある」と話しかけてきたのは、筆者の講演の際、音楽プレーヤーのイヤフォンをつけ、一見関心がなさそうにしていた男の子であった。また、講演後、子どもたちがA中学校に勤める在日コリアンの講師のところへ行くと、「キムちゃんも孫さんと同じ「ニチジツコリアン」なん？」と聞きにきていたと、講師本人から話を聞くことができた。そして、子どもたちが聞いた話の内容を保護者に伝えていたことも、学校長への聞き取りの中でわかった。この講演を初め、学校外の人々が関わる新しい取り組みに関して、保護者が関心をもつようになったということである。そして、教師側に保護者自らのさまざまなルーツ(在日コリアンも含む)について、語り出すということが起こってきた。講演から半年後、子どもたちが3年生になり、筆者が学校を訪れた際に学年の教員から語られたのは、「一生懸命自分の進路を考えようとしている」「全員が教室に入って授業を受けるようになった」という2年生の頃の学級崩壊を乗り越えた子どもたちの姿であった。

生徒たちの感想文や授業後の姿から、短い時間であっても、筆者と出会い、同じ時間を過ごして話をしたことが深く印象に残っていること、そしてその中には在日コリアンについての印象の変化にもつながった者がいたことがわかった。また、その影響は保護者にまで及んでいることが少しずつ明らかになってきた。生徒たちは、筆者が学校に行くまでほとんどゲストティーチャーによる授業を受けたことがなかった。もちろん非行防止という観点などから、全学年一斉で話を聞いた経験はあるものの、教師や警察など限られた大人たちの話でしかなかった。授業の成立が難しく、生徒指導に追われる中、教師がゲストティーチャーと協力して授業を作っていくことは、時間もなく面倒だと感じるかもしれない。しかし、以上のような生徒たちの意識や態度の変化から読み取れるのは、少しずつでもゲストティーチャー等の地域の人々が学校を訪れ、子どもたちと関わりあうことが、学校環境や家庭環境が厳しい中で生きている子どもたちにとって心のゆとりや平安を取り戻す一つの希望となるということである。そして、そのような実践の積み重ねが、より弱者へと暴力や差別を行うことへの抑止につながるのではないかと筆者は考える。

松下一世[1999]は、「社会的差別意識の内面化」について次のように述べる。

「自己否定感やフラストレーション、孤立感をもった子どもは、やがて社会的差別意識を内面化していく。いずれは「敵意を向けるとも安全な集団」としての部落や在日、女性、障害者に向けて攻撃の対象を絞っていくことになる」[松下1999:169]。

A中学校には家庭環境が複雑な子どもたちが多く、またそれが授業の成立が厳しい状況の一因にもなっていると考えられる。上記の研究で述べられている通り、子どもたちは偏見や差別意識を助長しやすい環境の中にいるとは言えないだろうか。つまり、学校で授業の成立が困難となり、さまざまな暴力事件が起こってきたことは、すでに社会的差別意識を内在化していく過程にいたと、筆者は考える。

日本では朝鮮半島にルーツをもつ人々に対する差別事件がたびたび起こってきた。特に、2009年は朝鮮半島だけでなく、外国にルーツをもつ人々への差別事件、ヘイトクライム(憎悪犯罪)が頻発した。2013年現在も、類似の事件が引き続き起こっている。その差別の背景には、日本社会における格差の広がり、そして、将来への不安が強く生活が不安定な中で、自分の寄って立つ所を偏狭なナショナリズムに求めた傾向が見られる。つまり、社会において排除されてきた、不安を抱えてきた人々が、率先してより弱い立場の人々を攻撃していくという差別構造が表面化してきた¹⁸。

そのような状況の中で、筆者が社会的に不安定な背景をもつ人々が多く暮らす地域で、さまざまな暴力が日常化していた学校にいた子どもたちに直接語りかけたことは、弱い立場の人々をさらに追い詰めていくのではなく、お互いを理解しあいたいという子どもたちや保護者へのメッセージにつながったのではないだろうか。子どもたちの感想やその後の姿から、在日コリアンの印象が良くなったかどうかに関わらず、筆者と出会い話を聞いて良かったと思った生徒が多数いたことが一つの証である。短時間の講演はほんの小さなきっかけにすぎない。このような講演から一連の多文化共生教育プログラムに発展させていくことで、さらに弱い者を差別していく構造を一つずつ編み直していく作業につながるのではないかと考える。A中学校で筆者と出会った子どもたちは、他学年で、家庭で、地域で、自分の感じた出来事を話すだろう。そこから、在日コリアンであれ、家庭環境が複雑な人々であれ、お互いを排除しあうのではなく、社会的に弱い立場の人たちが少しずつ歩み寄り、共に生きる関係へと発展させられるのではないだろうか。

課題としては、在日コリアンへの理解や多文化共生をテーマとした語りを受け止めるだけの自己肯定感、つまり自身の感情の安定や子どもたちの間での信頼関係づくりなど、人として最も基本的な安心、安全、平和を感じられるような土台づくりを並行して行う必要があることである。子どもたちの感想をみても、今回の話が受け止めきれず白紙で提出する子、殴り書きで「わからんもんはわからん」と書いていた子も少なくなかった。在日コリアンの子どもたちも数名いたが、「全てに共感する」「韓国語も学べるかな」と自分のルーツに前向きに捉えようとする感想があった一方で、ほとんど空欄で提出していた生徒もいた。この点に関しても、教師、ゲストティーチャー、

地域など、さまざまな人々が協力しながら、この安心、安全、平和を感じられる土台づくりに参加すること、その協力過程そのものが、排除から共生への編み直しの作業であると言える。

6. おわりに

本稿では、筆者がゲストティーチャーとして行った多文化共生をテーマにした語り、授業の成立が困難な学校に通う生徒の意識にどのような変化をもたらしたかを、在日コリアンの印象を問うアンケート結果を分析することで、考察した。その結果、授業の成立が困難な学校で、ゲストティーチャーが多文化共生をテーマに語る意義について、次の2点が明らかになった。

- ① 在日コリアンのように、さまざまな複雑な歴史の中で困難に直面しながらも生きてきた人々の様子を直接伝えたことは、特に家庭や学校環境が困難な状況にいる子どもたちの生き方へのヒントを示すこととなった。つまり、ゲストティーチャーやその家族が、子どもたちが生きていく上でのロールモデルの役割を担った。
- ② 在日コリアンの印象が良くなったかどうかに関わらず、筆者と出会い話を聞いて良かったと思った生徒の意見が多数あった。これは、さまざまな暴力が日常化していた学校にいた子どもたちが、ゲストティーチャーとの直接の関わりを通して、目の前の他者に関心を抱くようになったということである。つまり、さらに弱い立場の人を排除しあう関係から、少しずつ歩み寄り、支え合う関係へと発展させられる可能性を示した。

今後の課題としては、ゲストティーチャーと教員が協力しながら、長期的に実施していけるような多文化共生教育プログラムへと、どのように発展させていけるかということである。その際、多文化共生をテーマとした語りを受け止めるだけの自己肯定感、つまり自身の感情の安定や子どもたちの間での信頼関係づくりなど、人として最も基本的な安心、安全、平和を感じられるような土台づくりを並行して行うことが必要であろう。

[注]

- 1 ゲストティーチャーは、学校の「道徳」や「総合的な学習の時間」を中心に、指導者として授業を行う保護者や地域住民等を指す言葉である。学校によっては、外部講師とも呼ばれる。授業のテーマは、教員からの依頼や両者が話し合った上で決められ、その人の仕事や趣味、生き立ちなどについて様々である。
- 2 2011年発行の『教育と医学59 (7)』（慶応義塾大学出版会）では、「学級崩壊を建て直す」という特集が、2007年発行の『教職研修35 (10)』（教育開発研究所）では、「荒れた学校」をどう建て直すか——問題行動への毅然とした対応」という特集が組まれ、さまざまな研究者や実践者による提言が行われている。
- 3 深谷・丸山[2011]、川俣[2011]参照。
- 4 直接在住外国人との多文化共生をテーマにした実践ではないが、学級崩壊の危機に瀕したクラスで、国際理解教育の視点をいかした小学校での実践研究はある[宇土2004]。
- 5 伊井[2003]の国際理解教育の実践が、さらに発展した形として「大阪ASPnet（大阪ユネスコスクールネットワーク）」が挙げられる。このネットワークで行う別の学校との学び合いを通して、例えば「在日外国籍の方々が抱える課題と北淀高校が抱える課題における「疎外」という同根性が発見される」というように、在住外国人との多文化共生に関わる学びの機会も得られるようになってきている[伊井・大島2012]。
- 6 本稿の研究方法としては、授業前後に実施したアンケート記載内容の分析を主にしながら、参与観察や教員との打ち合わせの中で出てきたインフォーマルなインタビューも参考にしている。筆者は、2011年12月以降、学校長や教員との打ち合わせ、授業観察、多文化共生教育プログラムの実施、文化祭や発表会等行事の視察などで、月に1~2回のペースでA中学校に行くか、または他の場所で打ち合わせ等を行い、A中学校と継続した関わりをもっている。
- 7 この段落の議論は、外村大「ポスト植民地主義と在日朝鮮人——帝国主義崩壊後の民族関係の変遷に着目して」の整理をもとにしている[日本移民学会編2011: 186-206]。
- 8 京都市外国籍市民施策懇話会[2008, 2010]を参照。
- 9 竹沢泰子「序論移民研究から多文化共生を考える」を参照[日本移民学会編2011:1-17]。
- 10 西川長夫は、自身の小学校での経験、1960年代のバリでの経験を重ね合わせながら、『ボヴァリー夫人』などの小説、アルチュセールの「再生産論」、イリイチの「脱学校論」をあげて、「学校、それは正しく疎外の始まる場所」だと述べている[西川2011:90-95]。
- 11 A中学校の地域概要については、「平成24年度学校要覧」を参照しながら、学校長との打ち合わせ(2012年11月10日)の中で、聞き取ったものである。
- 12 「平成24年度学校要覧」を参照。
- 13 日本教育新聞「連載「育つ・若手教師の風景」/A中学校・前編」（2012年9月3日付）。
- 14 日本教育新聞「連載「育つ・若手教師の風景」/A中学校・後編」（2012年9月3日付）。
- 15 日本教育新聞 前掲記事「前編」。
- 16 事前アンケートの質問は次の通りである。(1)「在日コリアン」について、あなたはどのように思いますか？一つ選んで○をつけ、その理由を書いてください。＜1＞良い印象がある、＜2＞少し良い印象がある、＜3＞あまり良い印象がない、＜4＞悪い印象がある、＜5＞なんとも思わない、＜6＞在日コリアンが何のことかわからない(2)あなた自身を＜食べ物＞にたとえると、何になりますか？その理由も教えてください。(3)中学校生活をふりかえりながら、「ありがとう」の感謝の気持ちを伝えたい人の名前と、その人への「ありがとうのメッセージ」を書いてください。(4)中学校生活をおくりながら、不安に思っていることや悩んでいることはありますか？(5)あなたの夢は何ですか？今現在、それを叶えられるようにがんばっていることはありますか？/事後アンケートの質問は次の通りである。

(1)お話の中で、一番印象に残ったのは何でしょうか？その理由も教えてください。(2) (事前アンケート(1)と同じ質問)。

¹⁷ 畠中[2009:73-74]参照。

¹⁸ 2009年に日本各地で起こった外国人に対する差別事件については、前田[2010]に詳しい。

【文献】

- 深谷佳子・丸山広人, 2011, 「教育困難校における卒業者と中途退学者の比較研究——Q-Uから見えた傾向」『茨城大学教育実践研究(30)』291-302.
- 畠中宗一, 2009, 「学童期の子どもと地域の間関係——域の間関係が育むもの、地域への期待」『現代のエスプリ503 学童期のメンタルヘルス』67-75.
- 伊井直比呂, 2003, 「「教育困難校」から見える日本社会と国際理解教育の役割——“途絶”と向き合う学校文化の中で」『国際理解34号』136-157.
- 伊井直比呂・大島弘和, 2012, 「ESD実践のための地球課題探求アプローチ——大阪府立北淀高校の成果と大阪ユネスコスクール(ASPnet)学校群の試み」『国際理解教育Vol.18』82-89.
- 市川昭午・岩井彌一編, 2007, 『教職研修35(10)』教育開発研究所.
- 川俣智路, 2011, 「Community Basedな移行を模索する：教育困難校のフィールドワーク(年報フォーラム 北海道における格差・貧困と子ども・教育)」『教育学の研究と実践(6)』23-32.
- 教育と医学の会編, 2011, 『教育と医学59(7)』慶応義塾大学出版会.
- 京都市外国籍市民施策懇話会, 2008, 『2007(平成19)年度報告書』.
- 京都市外国籍市民施策懇話会, 2010, 『2009(平成21)年度報告書』.
- 前田朗, 2010, 『ヘイトクライム——憎悪犯罪が日本を壊す』三一書房労働組合.
- 松下一世, 1999, 『子どもの心がひらく人権教育 アイデンティティを求めて』解放出版社.
- 西川長夫, 2011, 『パリ五月革命私論 転換点としての68年』平凡社.
- 日本移民学会編, 2011, 『移民研究と多文化共生』御茶の水書房.
- 日本教育新聞, 2012年9月3日付.
- 宇土泰寛, 2004, 「国際理解教育の視点から生まれる地球時代の教室づくり——学級崩壊の危機から地球を物語る教室再生の取り組みを中心に」『国際理解35号』77-89.

(付記)本調査にご協力頂いた先生方に心からお礼を申し上げます。なお、本稿は平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成を受けたものである。